

## NIEを活用した教員免許更新講習

土屋 武 志 (愛知教育大学社会科教育講座)  
服 部 賢 (愛知教育大学非常勤講師)  
原 田 紀 保 (愛知教育大学市民参画型教員養成コーディネーター)  
市 川 正 孝 (安城市立錦町小学校)

### The NIE lecture by the teaching certificate update system

Takeshi TSUCHIYA (Department of Social Studies, Aichi University of Education)  
Masaru HATTORI (Aichi University of Education part-time teacher)  
Toshiyasu HARADA (Aichi University of Education teacher training coordinator)  
Masataka ICHIKAWA (Anjo City Nishiki-machi elementary school)

**要約** 愛知教育大学では、中日新聞社と協働して「新聞を教育に活用する」いわゆるNIE活動に関する講座を8月17日(月)から3日間計18時間開講した。本論は、その概要を報告するとともにその意義を考察する。

今回の講座では、新しい教育方法や新聞に関心を持つことができ、受講してよかったという声が多かった。それは、職場とは違う環境で異なる校種の教員たちが出会い、刺激もあったことも一因である。新聞記者から記事の書き方を学んで実際に書くなど日常出来ない体験をしたことも大きい。教員に新しい知見と技能を提供する現職教育として、NIE講座の効果は高い。

**Keywords** : NIE, 教員免許更新, 読解力

#### 1. はじめに

2009年、教員免許状更新講習が本格的に実施され、免許の確認期限を迎える教員は、30時間以上の講習を受け、修了証明書を都道府県教育委員会に提出して免許の確認つまり更新を行わなければならなくなった。講習は、「夏休み」期間を中心に大学等で開催された。

愛知教育大学では、中日新聞社と協働して「新聞を教育に活用する」いわゆるNIE活動に関する講座を8月17日(月)から3日間計18時間開講した<sup>\*1</sup>。受講者は、各日60名定員であった<sup>\*2</sup>。本稿は、この講座の概要を報告するとともにその意義を考察する<sup>\*3</sup>。

#### 2. NIE活動の意味

「NIE」とは、Newspaper in Educationの略称で「教育に新聞を」と呼ばれ、新聞を活用した学習方法や学習活動のことである。「NIE」は主に3つの活動からなる。1つは「新聞記事を活用して学ぶ活動」であり、2つ目は「新聞をつくる活動」であり、3つ目「新聞(社及び新聞記者)の役目や仕事を学ぶこと」である<sup>\*4</sup>。日本の新聞社の中にあつて中日新聞社は初期の段階からこの3つを視野に入れて「NIE活動」を教育界とともに進めている。今回の講習もその実績をふまえて構想された。特に中日新聞社NIE事務局のコーディネーターとして長年つとめた原田の実践に裏付けされている<sup>\*5</sup>。

#### 3. 新学習指導要領と「新聞」

2008年に告示された学習指導要領は、この年の1月17日にまとめられた中央教育審議会の答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」に基づくものである。答申は、OECDによる国際学力調査であるPISAにおける3つの主要能力=キーコンペテンシーを強化することを意図して行われた<sup>\*6</sup>。その主要能力を「読解力」と表現し、次のような具体的な学習活動によってその能力を育成するよう答申した<sup>\*7</sup>。

①体験から感じ取ったことを表現する

(例)・日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する

②事実を正確に理解し伝達する

(例)・身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する

③概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする

(例)・需要、供給などの概念で価格の変動をとらえて生産活動や消費活動に生かす・衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活を管理する

④情報を分析・評価し、論述する

(例)・学習や生活上の課題について、事柄を比較する、分類する、関連付けるなど考えるた

めの技法を活用し, 課題を整理する・文章や資料を読んだ上で, 自分の知識や経験に照らし合わせて, 自分なりの考えをまとめて, A4・1枚(1000字程度)といった所与の条件の中で表現する・自然事象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取ったり, これらを用いて分かりやすく表現したりする・自国や他国の歴史・文化・社会などについて調べ, 分析したことを論述する

- ⑤ 課題について, 構想を立て実践し, 評価・改善する  
(例) ・理科の調査研究において, 仮説を立てて, 観察・実験を行い, その結果を整理し, 考察し, まとめ, 表現したり改善したりする・芸術表現やものづくり等において, 構想を練り, 創作活動を行い, その結果を評価し, 工夫・改善する

- ⑥ 互いの考えを伝え合い, 自らの考えや集団の考えを発展させる

(例) ・予想や仮説の検証方法を考察する場面で, 予想や仮説と検証方法を討論しながら考えを深め合う・将来の予測に関する問題などにおいて, 問答やディベートの形式を用いて議論を深め, より高次の解決策に至る経験をさせる

この答申を受け, 国語科学習指導要領において次のような活動が新たに盛り込まれた。「編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読む」(小学校国語5, 6年生), 「新聞やインターネット, 学校図書館の施設などを活用して得た情報を比較すること」(中学校国語2年生) 「論説や報道などに盛り込まれた情報を比較して読む」(中学校国語3年生)。なお, 答申が指摘するように「読解力」の育成は, 国語科だけの課題でなく, どの教科においても重視されることになった。

このように, 「新聞」を活用する学習活動は, 今回の学習指導要領の改訂において, 特に重視されたのである。

#### 4. 愛知教育大学免許更新講習におけるNIE講座の概要

2009年度の講座の概要は以下の通りである。

- 8月17日(月) 210教室「プロから学ぶ「新聞」とは」  
9:10-10:10 オリエンテーション 担当土屋  
グループ(4名)作り4コマ漫画と記事見出しゲーム  
10:20-12:20 大ニュースをこう伝えた 担当土屋  
記者による体験談・記事を読んで質問をつくる・グループで質問を考え質問を

黒板に書き出す・記者によるコメント

- 13:20-16:30 インタビューの方法とまとめ方

担当服部

記者による一般的な解説・石黒選手へのインタビュー・800字の記事作成・記者による補足質問とインタビュー記事のまとめ方アドバイス

- 8月18日(火) 211教室「教えます「学級通信・学級新聞製作ノウハウ」

- 9:10-10:10 オリエンテーション 担当土屋

グループ作り 私のオススメ写真説明ゲーム  
指導要領と新聞

- 10:20-12:20 報道写真の撮り方 担当土屋

記者による体験談と受講者へのアドバイス

- 13:20-16:30 新聞の紙面構成と見出し 担当服部

紙面の特徴, 記事の種類, 記事の書き方

- 8月19日(水) 211教室 「活かそう新聞を教育に」

- 9:10-10:10 オリエンテーション 担当土屋

グループ作り 自己紹介ゲーム・問題解決ゲーム

- 10:20-12:20 新聞を読んで時事川柳を作る 担当原田

今日の時事川柳にチャレンジ=各自川柳をつくりグループ内で発表

- 13:20-16:30 シンポジウム「新聞と教育」 担当服部

シンポジウムをもとに論説「新聞と教育」(600字)作成

#### 5. 講座内容と特色

以下にこの講座での活動を具体的に報告する。

まず1日目の活動は, 参加者がペアをつくり, 自己紹介した後, さらに4人グループをつくった。次に, そのグループ内で, ペアの相手を紹介するという活動があった。この一連の活動は, 受講者間の人間関係作りも大きな目的であり, 「授業(講座)」の堅い雰囲気や和らいだ。この活動は, 講座の活動において必要となる「コミュニケーション能力の育成を図る」ことも目的である。この活動の後, 渡された新聞記事をもとに少人数グループで「見出しづくり」を行った。「大きい見出しを考えてください」という指示が出され, 4人のグループで見出しを考えた。身近な記事で, 大人の班なので特に支援はいらないが, 子どもの場合にはグループでの話し合いの仕方を同時に指導・支援していく必要がある。班の組み方では今回, 男女混合という点が配慮された。

午前中にもう一つ「中日新聞はこう報道した」というテーマで, 司法記者クラブ・キャップの有賀記者の

裁判員裁判の最新現場情報を聞いた。これは「NIE」活動の「新聞記者の役目・仕事を学ぶ」という活動の一つである。実際の事件（トピック）をいかに取材し、報道しているかは、大人でも小学生の子どもでも興味深い。今回提供された情報は、最近の「裁判員裁判」に関する報道の内幕であり、取材の仕方や新聞の作られ方が生き生きと伝えられた。そのため、受講者は強い関心をもって聞くことができた\*8。

有賀記者の情報提供後は、記者への質問をグループごとに考えた。ここでもグループ内の話し合いによって、質問を整理していったのだが、整理・分類する上で「的確（ポピュラーな）質問」「個性的な（ユニークな）質問」という視点で2種類に分けた。「個性的な（ユニークな＝やや的はずれな）質問こそ重要」という指摘が記者からあったのは重要な指摘である。この2分類は、考える視点を多様にし、学習者の学びを豊かにする目的で実施したものであり、その意図に気づいた発言である。

午後は「インタビューに挑戦」ということで、「北京オリンピック・シンクロ代表選手」の石黒由美子選手の「模擬記者会見」を行った。最初は石黒選手の簡単な自己紹介を聞きその後、グループ内で質問事項を考えるという午前と同じ学習パターンをとった。

現職教員である受講者の質問は多種・多様で変化に富んでいた。しかし、インタビュー後の服部のアドバイスは「質問内容が多種・多様に富みすぎ、見出しが浮かばない」「記事のテーマに絞った質問をすべき」「記事の構想を立て、特化した質問を」ということであった。

さらに、「石黒選手の話を中心に納得しており、深く掘り下げていない」「過去の話で終わっている。（選手は現役を退いているのだから）未来に向けての話聞き出したい」という指摘があった。

質問は多様であっても、「ポイント（仮見出し）」を意識したものでなければ散漫になってしまうという指摘である。受講者は、これらの助言を生かし、取材メモをもとに、「人（ひと）」欄の記事に取り組んだ。

一連の「取材」が終わった後、土屋からは次の3点が教育的観点として強調された。

- ①一人では学びが深まらない。お互いに学び合うのが学校である。一人の学習なら家庭でもできる。
- ②書いた記事を順番に読み合うのが大切。学びの振り返りは「キーワード」を使って振り返るのが大切。そうすることでポイントをつかむ。
- ③「新学習指導要領」では学力（読解力）を保障するために、筋道を立てて、具体的に書く・話すトレーニングをすることが必要である\*9。

2日目の8月18日（火）は「学級通信・学級新聞製作ノウハウ」というテーマであった。午前中は報道写

真の撮り方がテーマで、元・報道写真記者の「体験談」と各受講者が事前に用意した写真への記者からのアドバイスを聞く学習活動である。

2日目の午後は整理部（レイアウト）記者30年以上の経験をもつ門脇力氏を招いた「見出しの付け方講座」であった。

現職教員がつくった学級通信を見本に、見出しの付け方について非常にいいアドバイスがあった。学級通信は、学級の保護者や子どもたちに、教員が自分の思いや学級の様子を伝えるために発行しているので、思い入れが強い。そのような現状を十分理解した上で、門脇氏は次の点を特に強調した。

- ①記事を詰め込み過ぎて読みづらい。
- ②写真が小さく見にくい。メリハリをつけて、中心の写真を大きく扱う。
- ③見出しが長い。10字～12字以内に見出しの文字数をおさめる。
- ④「！」「!？」「!!!」などの記号やイラストなども減らす。

また、学級通信を出すときの心構えとしては次の5点をあげた。

- ①教師（学校）と家庭（保護者）との「橋渡し」をなすものと自覚する。
- ②自分の思いを強調し過ぎることなく、事実（様子）を伝える。
- ③継続的な発行をすることで信頼が得られる。思いつきで発行しない。
- ④見出しやレイアウトに気をつけ、「読む気」が起る紙面を心がける。
- ⑤明朝体を基本にすっきりした紙面をつくる。

見出しについては、実際の新聞を使って、さらに下記の点について助言があった。学級通信（新聞）は「言葉で勝負」すべきであり、「贅肉をはぶく」ことが重要である。新聞の声欄を示して、すべての見出しが伝統的に「6文字×2行」の「12文字」でそろえてあることを指摘した。

見出しは特に「正確correct、明快clear、簡潔concise」の3つの「C」を意識し、なおかつ「ユーモアのセンスを忘れずに」付けることが大切だと強調した\*10。

2日目の講座で土屋から示された教育的観点は次の3点であった。

- ①グループの中で写真を見るとき「疑問」を探したり、「不思議発見」をしたりする活動を通して説明する力や聞いたりする力を育てる。
- ②疑問を探すことによって事実に対する興味・関心を高める。
- ③活動型の学習では授業者の意図・ねらいがしっかりあるかが大切で、「ねらい」がしっかりあるとき、それは単なる遊びでなく授業として成立する。



3日目の午前中は「新聞を読んで『時事川柳』を作る」という内容であった。「グループづくり」「自己紹介ゲーム」「問題解決ゲーム」などの後に、時事川柳の専門家である浜口剛史氏を招いた講話であった。

さて、ここでは、講師から配られた資料をもとにテーマ「新聞と教育」の観点から「川柳・時事川柳」の特徴と意義を簡単にまとめておきたい。

まず「俳句」と「川柳」の違いはおおざっぱな掴みで言えば、前者が「自然」を、後者が「人間」を諷刺するものである。さらに、そこに三要素「滑稽味」「軽味」「皮肉味」さらに「真実味」が加わり、深さ、広がり求められるようになった。

「時事川柳」は対象を一刀両断にする切れ味の鮮やかさ、時代をチクリと風刺する批判精神が求められる。「時事川柳」は「歴史・時代の証人」であり「声なき声」の代弁者でもあるといわれる所以である<sup>11</sup>。

最後に、受講者の秀句として3点を紹介しておく。

「裁判員おのれ裁かず人裁く（恵理子）」

「郵政と共に問われるチルドレン（栄治）」

「リストラが適材適所死語にする（三喜子）」

3日目の午後は、「新聞と教育」と題したシンポジウムを実施した。中日新聞社取締役（電子・電波担当）水野和伸氏と土屋、市川の3人がシンポジストをつとめ、服部が司会を担当した。

水野氏は豊富な記者経験と新聞の置かれている現状をもとに、概ね次の6点を指摘された。

- ①2010年は国民読書年にあたり、文字・活字文化推進機構の取り組みがなされる。言語力検定の実施や学校図書館向け「新聞配備5カ年計画」が考えられている。
- ②経済協力開発機構（OECD）が2000年から行っている学習到達度調査では日本の子ども（15歳）の読解力は回を追うごとに低下している。
- ③「5ない症候群（読まない、書かない、話せないなど）」が深刻化し、言語力が必要である。
- ④読解力トップのフィンランドとはどこが違うか。若者を取り巻く情報環境に差はないが、フィンランドには活字文化と親密な国民性があり、読み終えた後に、ディスカッションがある。
- ⑤初等・中等教育の在り方や少人数の教育に違いが見られる。
- ⑥新聞、ラジオ、出版社を含めたメディアミックスによる視覚、聴覚教育、新聞を活用した「NIE活動」が言語力アップには欠かせない。

水野氏がふれたフィンランドを含めて世界各国の学習状況と新聞との関係をもう少し詳しくみる。

経済協力開発機構（OECD）の「生徒の学習到達度調査（PISA）2000年」に「各国の新聞を読む頻度の割合と、総合読解力」に関する質問がある。それによれ

ば、新聞を読む頻度が上がると点数上がっていることが分かる。「（新聞を読むことがまったくない、ほとんどない」と答えた子と「よく読む」と答えた子とでは読解力の点数で非常に大きな差を見せている。これは各国共通の傾向である。池上彰氏は「他のニュース媒体と比較していないので…とくに新聞が優れているという結論は導け」ないが「少なくとも『新聞を読む子どもほど学力は高い』という傾向があることは間違いない」と述べている。氏はさらに日本の学力調査の結果にもふれ「ニュースにふれることで頭が鍛えられる」「学力が高いほど社会的な出来事に関心をもつ、という可能性も否定できませんが両方の側面がある」と述べている<sup>12</sup>。

新聞（水野氏）と放送（池上氏）という異なるメディアで長い記者経験をもつ両ベテランジャーナリストの見解は一致している。

なお、本講座の参加者から「多くのメディアの中で、なぜ新聞か」と言う質問が少なからず寄せられた。これに対しては新聞の「信頼性」「一覧性」「記録性」などがあげられた。さらに「新聞づくり」や「新聞切り抜き作品づくり」などは子どもたちの学習意欲と学びの力、協力性を大きく育てることができると考えられる。

## 6. 講座の意義—受講者による論説「新聞と教育」の場合—

今回の受講者は、講座からどんな点を学びとったであろうか。3日目の最後には、シンポジウムをもとにコラムを書く活動を行った。その中には、自身の経験と照らし合わせて論じたものもあった。それは、この講座の評価でもある。過去の「NIE活動へのかかわり」や新聞への接触度から「意欲」に濃淡はあるものの、かなり意識の変容がみられる。3人の声を紹介したい。

★ 実際新聞はあまり読まない。または、新聞は読んで知識や情報を得るものだと思っていた。しかし、新聞はコミュニケーションのツールになる。みんなで記事を探したり、友達と記事の意見交換もできる。様々な可能性を秘めているものだと思った。だから、もっと新聞を讀んでいこうと思った。確か子どものころ、親から「良い記事が載っているから読んでみて」「記事どうだった」と聞かれたことがある。今思うと、新聞が親子のコミュニケーションのツールとなっていたのだ。このようなやりとりを教室の子どもたちと行ってみたら、新聞を教育に取り入れていくきっかけになるだろう。

★ 新聞は、児童・生徒に自分自身の考えや意見を持たせ、「理解力・表現力・思考力といった現在の日本の子どもたちが不足している能力を身につけさせ

るための大きなツールになる」ということを学ぶことができた。しかし、そのような能力を身につけるためには、新聞に対する教師自身の眼力を鍛えることがもっとも大切である。そして、児童・生徒が興味・関心をもつための指導法を学びグループ活動で取り組ませたり、見出しを考えさせるとか、4コママンガに台詞をつさけせるといった比較的簡単なことから始めたい。その上で徐々にディスカッションやディベートといった方法を高めていくことが良い方法であると思う。大切なことは、実際にやってみることである。

★「新聞はタイムリーな教材である」私は今までの実践でそう考え、今日のシンポジウムでも確認できました。中学校に勤務していた際に、毎年続けていたのが、「コラム学習」。興味あるコラムを選ばせ、各段落の要点と筆者の要旨を短文にまとめさせ、さらに、筆者の意見について自分なりの賛否の意見と根拠を述べさせる。これが、一連の活動でした。水野さんや土屋先生がおっしゃったようにフィンランドメソッドで一番大切にしているグローバルコミュニケーション。自分の考えを自分の言葉で、根拠をもって説明できること。つまり、グループ内で意見交換することにより、コミュニケーション能力や論理力が発揮できます。現在は小学校勤務ですが、国語の発展学習（戦争）で、道徳（いじめなど）で、その他食育等で活用しています。今後も子どもの基礎的能力のアップのために新聞を活用します。

## 7. おわりに—講座への評価と今後の課題—

この講座に関する受講者アンケートの結果は以下の通りである。アンケート項目のうち「この講座を受講したあなたの最新の知識・技能の習得の成果についての総合的な評価」について報告すれば、1日目は、4段階中の4（十分満足した・十分成果を得られた）は、71、2%、3（満足した・成果が得られた）は、27.1%であった。2日目は4 = 58.3%、3 = 38.3%。3日目は、4 = 55.0%、3 = 40.0%であった。いずれも1段階（満足しなかった・成果が得られなかった）の評価はなかった。

1日目に対して2日目、3日目の評価が低下した。このことについては、以下の点を要因と考えている。2日目は、報道写真の撮り方について技能的視点から、受講者の作品への具体的アドバイスをを行うために、専門家である元写真部記者をゲストとして招いた。コーディネートを担当した原田によれば、「体験談が実際の新聞写真を媒介にした話になっていなかったため、この写真をどう撮ったのかなど、受講者は生の現場の苦労や工夫、失敗を聞きたかったはずだ」。今回はゲストの直前の交代という事情もあり、事前打

ち合わせが十分でなかった。講座の意図を十分に説明し、授業途中で意図に沿うリードを行う必要がある。この点は、3日目の時事川柳についてもあてはまる<sup>\*13</sup>。十分な打ち合わせ時間の確保は、今後の課題である。

最後に、本講座では直接的に扱わなかったが、「生涯学習」の視点から「新聞活用」についてふれたい。広島大学の小原友行氏は、「社会認識教育の本番は生涯学習の場においてであり、学校教育におけるそれはそのための準備であり、土台づくりであると考えられることもできよう」と述べている。そしてその主体になるものを4つあげ、「活字メディアによる社会認識教育」の重要性について強調している<sup>\*14</sup>。

本講座の受講者は、アンケート結果からもわかるように真剣に受講し課題に取り組んでいた。その受講者に休憩時間や講習終了後に更新制度について尋ねた。すると、夏休みとはいえ、30時間を生み出すことが難しいほど教育現場は忙しいという時間的な苦労を話されるケースが多かった。また、教師としての専門性を向上させるために日頃の職場で出来ない体験をするには、30時間は不十分だし、大人数での単なる受身の座学であれば、30時間は長すぎる。この制度が、形式的な通過儀礼になるなら、意味がないのではという声もあった<sup>\*15</sup>。

一方、今回の講習では、新しい教育方法や新聞に関心を持つことができ、受講してよかったという声が多かった。それは、職場とは違う環境で異なる校種の教員たちが出会い、刺激があったことも一因である。新聞記者から記事の書き方を学んで実際に書くなど日常出来ない体験をしたことも大きい。教員が日頃出来ない社会体験的な講習を受ける時間を充実する。そのような制度保証のもとで本講座のような新しい知見や技能を重視した講習はより効果を発揮できると考えられる<sup>\*16</sup>。

### 【付記】

本稿は、土屋・服部・原田・市川の共同研究により作成した。原田と土屋が講習プログラムの企画を担当し、中日新聞社NIE事務局長でもある服部が全体的調整をおこなった。プログラムの記録を愛知教育大学大学院生でもある市川が担当し、本稿は、主に5章、6章を市川が、他を主に土屋が担当した。

\* 1 愛知教育大学は、2005年度から中日新聞社と覚え書きを結んで教員養成に関する協力を得ている。主に同社NIE事務局と協働により、「総合演習」等の授業でNIE活動を取り入れた授業を実施している。なお、教員免許更新講習における本格的なNIE講座は、日本でも初めての講座である。

- \* 2 3日間の講座は、連続講座でなく各日ごとに受講者が違う講座である。ただし、各日とも違うプログラムで実施した。1日目は59名、2日目、3日目は各60名が受講した。
- \* 3 「免許更新講習」については「推進賛成派」と「反対廃止派」があり、議論が分かれている。本稿では、この問題を直接に考察対象とはしない。
- \* 4 橋本暢夫「NIEの先駆者大村はま—単元「新聞」による「自己学習力」の育成—」『日本NIE学会誌』第2号、2007、pp.1-10では、従来から指摘されている「新聞を学ぶ」「新聞で学ぶ」のほか「新聞から学ぶ」という意義を新たに指摘した。これは、「1新聞の文章の明晰さに学び、民主社会の一員として「明晰に考える」、2常に「批判精神」を備え世界の平和に貢献する、3主体的に考え、自ら進んで行動する」という新聞をつくる立場からの学習意義を指摘したものである。本稿もこの意義の重要性を指摘したい。
- \* 5 中日新聞社では、原田氏のコーディネートのもとで『新聞学習カリキュラム小学校編』(2007)、『新聞学習カリキュラム中学校編』(2008)を作成し、実践の体系化理論化を行っている。
- \* 6 ①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力 ②多様な社会グループにおける人間関係形成能力 ③自立的に行動する能力の3つである。
- \* 7 答申pp.25-26
- \* 8 過去、市川が記者を教室に招いた時には、「インドの小学生を取材した体験」や「飛行機の超低空飛行をスクープした特ダネ体験」「地震取材で余震に襲われ、山崩れに遭遇した体験」などを話していただいたが、子どもたちは目を輝かせて聞いていた。小・中学生が対象になった場合は、集中できる時間とレベルにあった内容を吟味することが、より重要になってくるだろう。
- \* 9 ③の観点については文科省の言語協力者会議も次のような報告を出している。「子どもに言葉の力がなと感じている。…論理的思考力を身につけるためには、技術的な部分も大事だが、新聞を読んで『意見が言える』ようになるなど、基盤となる日常生活の中にもっと論理的思考力を取り入れていくことが重要である。」
- \* 10 「3C」という表現は小学生には難しいが、「ユーモアセンス」や「たとえ(比喩表現)」は市川の指導実践を振り返っても重要だと感じている。「見出し」の学習は少人数で行えば、コミュニケーション能力を育成できるし、言語感覚を磨く上で極めて重要である。
- \* 11 市川は「時事川柳」の実践は多くはないが、写真付きの短い記事で行えば小学生でも十分可能である。記事の文章で背景をある程度理解できるようにし、写真で主に五・七・五の言葉を考える。「写真俳句」「写俳句」などにも似ており、楽しみながらの学習を行える。「川柳づくり」に慣れてくると新聞への抵抗感を和らげ、言葉遊びにも似た学習効果生むことができる。
- \* 12 池上彰『小学生から『新聞』を読む子は大きく伸びる!』(すばる舎 2008年)
- \* 13 浜口氏の川柳の話は川柳へのなれそめから始まって、その歴史的経緯などにも言及し、まさに講義そのものであったが、「新聞と教育」という点から見るとやや難しい内容になってしまった。今回の講座で言えば、各自が「時事川柳」のもとになった社会的な出来事や記事を提示し、「時事川柳」をその場で創作する意図でコーディネートしたが、「授業の意図と講師の話」がずれてしまった感があった。
- \* 14 小原友行「生涯学習としての社会認識教育の開発」、『社会科教育のニュー・パースペクティブ』(明治図書 2003)。さらに同書では山口大学の吉川幸夫氏が、「活字メディアに対する読者側の疑問を誘発し、それをきっかけとし追究を支えること」が大切であると説き、新聞などの活字メディアの「生涯学習」における役割や意義を指摘している(「活字メディアにおける社会認識教育」)。
- \* 15 確かに、この講習が形式的になる危険性は大きいと思われる。第一に教員にとって免許が更新されるという消極的なメリットでしかなく、これによって、上級免許に切り替えられることもない。第二に教員が置かれている現場の課題は、むしろ現場にいる自分たちが一番よくわかっているもので、大学の理論的で座学を中心とした講習は役に立たないという気持ちになりやすい。このような意識が強まれば、形骸化して、教員から児童・生徒と向き合う時間をいたずらに奪うだけの制度になりかねない。
- \* 16 本講座実施後の総選挙において、民主党に政権が移行した。それに伴い、教員免許の更新制も制度見直しの対象になった。本講座の成果は、免許更新講習としての継続性は不透明であるが、NIEを実践できる教師を育成するためのプログラムとしての有効性は検証できたと考えられる。